

3年前、2022年の7月17日、私は前任地の宮崎で「マルタとマリア」についての説教をいたしました。その内容は、この30年くらい、ほとんど内容を変えていません。というのは、私が子どもの頃から聞かされていた話が、神学校を出て10年くらいして、全く新しい解釈をカトリックの神父さんの本で気づかされて、私にはもう、伝統的なマルタとマリアの話はできなくなってしまったからです。

今日の福音書は、教会のみなさん、よくご存じでしょう。イエス様がある村にお入りになった。ということですが、これはベタニアという村です。都のエルサレムの東側にオリブ山という山がありその山を越した先にある村で、このマルタとマリアの姉妹にはラザロという兄弟もいたのですが、今日の所には出てきません。しかしこのラザロが大変重要な人物であることは、ヨハネによる福音書で登場してわかってきます。このルカによる福音書の16章には金持ちの家の前にいるラザロのことが出てきますが、これは別の人物です。

まあ、ラザロの話は後回しにして、今日の福音書に注目します。ここに二人の姉妹がいますが、全く違った行動をしています。イエス様の足もとに座ってその話に聞き入っているマリアと、もてなしのためにせわしく立ち働いているマルタです。そして、マルタは自分だけもてなしのため働いて忙しいので、マリアに手伝うように言ってほしい、とボヤクのですが、イエス様は「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」と、たしなめられたお話です。

この物語から、キリスト教の歴史にもいろんな影響が出てきました。たとえば、聖書に書かれたイエス様の言葉に従い、それに専念する生活をしようと、修道院で生活している人々がいます。その中を二つにわけて、祈りに専念するトラピスト修道院のようなものと、社会奉仕や教育事業などをする修道会とがあります。それらを比べて、私たちの目に見えない、遠いところで祈りの生活をしている人たちのことに、高い評価をするようになったことは収穫です。しかし、忙しく働くことは、イエス様の足もとで話を聞くことよりも、劣った仕事なのでしょうか。

同じ修道院の中でも、祈ったり、本を書き写したりする仕事の方が、修道士たちの食事などを作る仕事よりも立派だ、というふうに考える風潮もありましたが、その考えは正しいのでしょうか。マルタという名前よりも、マリアという名前の方が、優れている、と考えるのは、正しいのでしょうか。

婦人会などで、「マリアの心とマルタの手を与えてください。」みたいなお祈りができたりするのも、このような解釈を見直したい、という表れなのかもしれません。しかし、マルタは、この世のことにいつも心が奪われ、マリアは正しい判断をしている、と決めることはできるのでしょ

前にも紹介しましたが、「ファイブゴスペルズ」という本を持ってきました。その話をします。1993年と言いますから、今から32年前の話ですが、欧米の数十人の新約聖書の学者さんたちが、「福音書に出てくるイエス様の言葉は、イエス様が本当に言われた言葉かどうか」ということを、それぞれの研究に基づき、投票によって、四つにランク分けした福音書です。

おそらくイエス様はこの通りのことを言われただろう、と一番ランクの高い言葉は、赤。この通りではないが、これに近いことを言われただろう、というのがピンク。何となくイエス様の香りがするなあ、というのが空色で、これはイエス様の言われたことではない。誰かが後で付け加えたものだ、というのが黒というふうに、色分けされているのです。

さて、問題にしたいのは、先週と今週の福音書です。先週の「善いサマリア人」のお話は、この本では、赤という最高のランクになっています。この物語は、イエス様がこのとおりに、律法の専門家に対して皮肉を込めながら話されたことなのでしょう。ところが、それに続く、今日の「マルタとマリア」の話で、イエス様が最後に言われた言葉は、黒です。

どうも、イエス様は、この通りのことは言われなかったのではないかと。前の「善いサマリア人」の話で、隣人愛が強調されているので、律法の専門家との議論で『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』という、前半の戒めの言葉を補うために、隣人への世話より御言葉を聞くことに専念すること強調するお話にしたのではないかと、ということです。だから、元々は、もっと違う話だったのに、お話の内容が書き換えられたのではないかと、ということです。

さあ、それでは、今日の「マルタとマリアの話」は、そのように曲げられて伝わる前は、元々どんな話だったのでしょうか？

私は、この箇所の説教準備している時、先ほども言いましたが、おもしろい解釈に出会いまして、それ以来、その考えに心酔してしまったのです。それは、マルタとマリアは、姉妹ですが、相当年齢に差があった。もっと言えば、イエス様がベタニアのこの家を訪ねた頃、マリアはまだ幼い子どもだった、という解釈です。

今日の聖書の箇所では、イエス様は初めてマルタの家を訪ねたかのように受け取られる表現です。しかし、ヨハネによる福音書では、11章で、この家のラザロが病気で死んだ時のことが書かれています。ラザロが病気だということで、マルタとマリアの姉妹はイエス様に来てもらうように、人に頼んでいます。また、イエス様もこの一家を愛しておられたことも書かれています。イエス様が来られるのが遅くて、もうラザロは死んで墓に入れられていました。イエス様を迎えた時、イエス様が来るのが遅いことに対して、不平を言うのはマルタです。そして、イエス様と復活についての話をしています。彼女は立派な信仰を持っている人です。

一方、マリアの方は家にいます。マルタがイエス様の来られたのを告げると、マリアはイエス様の所へ来て、やはり、姉と同様、イエス様が来られるのが遅いことをボヤキますが、復活についての話をするのではなく、ただ泣くばかりでした。でも、イエス様は、その泣くマリアたちの姿を見て、心に憤りを覚え、興奮して、ラザロの墓に向かい、墓から呼び出すのです。

このマルタとマリアの違いを、一方は活発に活動し、一方は泣くだけ、というふうに受け取ることもできますが、これは、単に大人と子どもの違いというふうには、考えられないでしょうか。

大人のマルタは、復活の教会で、納得できるけれど、幼いマリアにはそんなことはわからない。そして、悲しみを泣いてしか、表現できない。困ったイエス様は、この少女を慰めなければ、という思いに駆られて、行動を起こされた、ということです。

さて、このラザロが生き返る話の次に、12章では、イエス様がベタニアでマリアから高価なナルドの香油を塗られる話が出てきます。ちょっと読んでみましょう。

ヨハネ12章1～8節 ◆ベタニアで香油を注がれる

過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていたからである。イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

ここでは、マルタはやはり給仕をして、忙しく働いています。ラザロはお客のイエス様たちと話していたのでしょう。ところが、マリアが急に、非常に高価な香油を持ってきて、イエス様に振りかけたので、この家は大騒動になったのでしょう。

ここでは、イスカリオテのユダが、油の無駄遣いに対して、批判をしています。おそらく、マルタやラザロも、これは大変なことをしてくれた、という気持ちで、それを見ていたのではないのでしょうか。

ところがイエス様は、ここでも、マリアの行動を、容認するような発言をされました。

「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

これは、今日の福音書の、イエス様の最後の言葉にも共通するのではないのでしょうか。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

実は、マリアは幼い女の子だったのです。彼女は、お兄さんが亡くなった時、自分は泣いてばかりで、何の役にも立たなかった、という子どもながらの反省をしていたのでしょう。そうしたら、イエス様が過越祭の6日前にやってこられて、自分はエルサレムで亡くなる、という預言をされた。それで、幼いマリアは、イエス様のために、葬りの用意をして、立派にその仕事をしなければ、と、葬式に使う香油を取り出して、準備にかかった、という話です。

そのように、マリアは小さな子ども、と考えると、早く両親をなくしたマルタの家では、マルタはマリアの母親代わりで、幼いマリアはいつもマルタにつきまとい、もてなしの仕事の足手まといになることも多い。

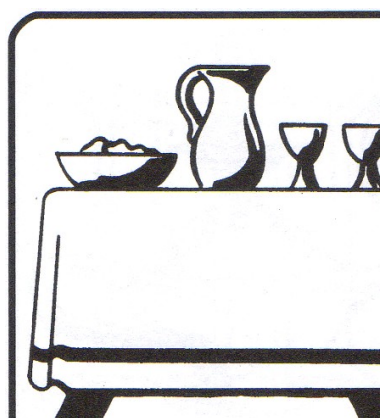
ところが、今日、イエス様が久しぶりに来られると、マリアはうれしくて、イエス様の話を聞こうとして、大勢の大人と一緒にイエス様の足もとに座っているのです。いつもと違って、マリアは神妙な顔をして話を聞いています。しかし、幼い子どもには、イエス様のお話が理解できるはずありません。

その様子を見ていて、お姉さんのマルタは、マリアのいつもとは違う様子が、おかしかった。それで、忙しい仕事の合間に、ちょっと口を出して、「イエス様、今日のマリアはおかしいでしょう。むずかしい話なんかわからないのに、どうしたんでしょうね。大人に混ざって、座っているより、私の手伝いでもするように言ってください。」と声をかけた。ところが、イエス様は、「いやいや、マルタ。マリアは、ここに座っていられるんだから、座らせておきなさい。いつも、マリアが自分につきまとして、仕事にならない、とあなたはボヤいていたじゃないか。こうやって、難しい話も一生懸命聞こうとしているマリアは、そのままにしておいた方がいいんだよ。」そんな会話が、いつの間にか、マルタとマリアの対立の話になってしまったのではないのでしょうか。

ここまで話したのは、マルタという女性に対して、私たちが誤解していないか、ということと言いたかったのです。マルタは自分のもてなしの仕事を、何もしないマリアより立派であるかのように考えている、というふうに受け止められていないか。しかし、他のところでは、マルタは決してそんな高慢な態度をしていないし、どちらかと言うと、イエス様と復活について、信仰深い会話をする、熱心な人であったと言いたかったのです。

いずれにしろ、マルタもマリアも、イエス様を歓迎するために、自分なりのできることを努力していた、ということにとどめておいて、決して一方が他方より優れている、という考え方は捨てたいと思います。

【おまけ】 マルタの紋章



聖マルタは、キリストをもてなすため立ち働いたと言われている（ルカ 10：38～42）。白色の筋のはいった青色のクロスがかかったテーブル、暗褐色のカップ、水差しと赤色の果物の盛られたボウル。見えているテーブルの足も暗褐色。地は銀色である。